

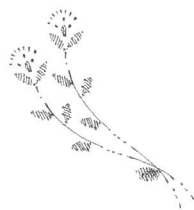
# 人とつむぎ、 織りなす日々のなかで 高齢期の発達

## 第2回 大人の仲間になりました

### ■あざみで暮らすナツコさん

80歳になり、思い通りにできないことが増えてきた現状にとまどう、ナツコさんの話をしたいと思います。数年前に、散歩中に転び、脚を骨折しました。しばらく、車いすでの生活になりましたが、リハビリもがんばって、今は一人で歩いています。ただ、体のバランスを崩しやすく、一人で長時間歩いたり、段差を上り下りするのには、ケガにつながる可能性があります。そのため、2階にあった部屋から1階に部屋を変更することになりました。

これがナツコさんにとっては、大問題なのです。2階には、友だちのユミコさんと妹のように世話をしてきたサトコさんがいるからです。骨折するまでは、2階のリビングで、その人たちと編み物をしたり、手紙を書いたりしながら、いつでも一緒に時間を過ごしていましたが、それができにくく



なるわけです。

ナツコさんが二人に会いに行きたいときは、2階のリビングまで職員が付き添うことになりました。しかし、ナツコさんは一人で動きたいのに、職員がさせてくれないと不満げに言います。ケガにつながる可能性を説明すれば、わかってくれるのですが、早く行きたい思いが強く、職員の付き添いを待つ時間が納得できません。老いていく自分の変化と、どう向き合っていくか、ナツコさんは毎日悩んでいます。

### ■がんばりの人

ナツコさんが4代のころに、当時あざみの指導員であった石原繁野さんは次のように書いています。

「心も体も強い強い人になりたいことが彼女の願いです。彼女のむすび織をする指の動きには、だれもが目をうばわれます。工場の誇る日本一のむすび織名人です」

### ■人と支えあう

強い人になりたいと願っていたナツコさんは、10代後半で「あざみ寮」に入寮しますが、指先や身体全体の動きが弱い人だったようです。ひらがなの読み書きができ、家では刺繍をやっていたようで、モノづくりに熱心にとりくむ姿は子どものときからあったのだろうと思います。不器用ながらも大変がんばる人で、入寮後にむすび織をはじめてから今まで、生涯のしごととしてとりくみ続けてきました。

ナツコさんのむすび織は色あざやかで、温もりが感じられる作品です。むすび織は、全身と指先に力を込めてやる作業ですが、不器用なナツコさんがどれだけの時間をかけてがんばってきたのがわかります。できるようになる、上手になるためには、がんばる毎日の積み重ねが大切だとナツコさんは知っています。

石原さんが書いてくれた文章を読んで、ナツコさんは大変喜び、お礼を言っていたそうです。そして、自分の喜寿を祝う会では、「私のむすび織は日本一です」と自己紹介しています。ナツコさんがしごとに誇りをもっているのは、しごとの指導者からほめられたからではありませんが、モノづくりのしごとに出会い、何十年の間、がんばってきた自分、成長した自分を実感しているからだと思います。

80歳になった現在も、むすび織を続けています。体力に合わせて、しごとの時間は短くなっていますが、ナツコさんはもつとしごとがしたいそうです。なぜなら、ナツコさんのむすび織は「日本一」だからです。



張 貞京

ちゃん ちよんきよん/京都文教短期大学准教授。共著に『保育者のためのコミュニケーション・ワークブック』（ナカニシヤ出版）。

ナツコさんがなぜ、怒りをぶつけるチサコさんに尽くしているのか、職員との話でナツコさんは、次のように答えています。チサコさんには、自分のことを「いつも相談している」のだそうです。ナツコさんがチサコさんのできなくなる苛立ちをどこまで理解していたかはわかりませんが、怒りを